

「過渡期の鼓胴その後」再び

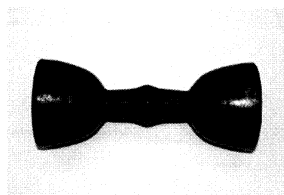
高桑 いづみ

十年以上昔になるが、「鍔仙」紙上で奈良の石上神宮が所蔵する古風な烏胴を紹介したことがある(「能以前の鼓胴」平成六年五月号)。平安時代末から室町時代の絵巻にはとさおり大ぶりの烏胴が描かれているが、紹介した烏胴は絵巻の鼓胴を彷彿とさせるもので、全高が三二〜三五センチ。現行の大鼓より大ぶりで、お椀のように口が大きく開いた乳袋の上に線を彫り込んだ点が、能の鼓胴としては特異であった。実は雅楽でも鼓胴を用いるが、雅楽の鼓胴は乳袋上に突起した筋を設け、カラフルに彩られた花や連珠文、剣先文をその筋で区切っている。能の鼓胴に比べると、乳袋の口も大きく開いたものが多い。

そこで石上神宮の鼓胴を、雅楽から能楽の鼓が派生する過渡期の鼓胴と位置づけ、論文などで発表してきた。幸いなことに、論文の発表後さらに情報をいただいたり、他でも発見することがあって同じ形状の鼓胴が十五筒になったので、この三月、「過渡期の鼓胴その後」と題して再び報告したところである。一、三の例外はあるが、全高は三〇〜三五センチ。能の鼓胴より大ぶりだが、そのサイズである程度規格化されていたのである。

報告書の抜き刷りを関係する方々にお送りしたところ、東京在住のM氏から、同様の鼓胴を数年前に関西で入手した、という新たな情報をいただいた。今まで調査した鼓胴とは少々異なる点もあり、それによって多少考えるところも増えたので、紙面をお借りして報告したい。

新出の鼓胴は、乳袋上に線刻を施した過渡期の形状だが、乳袋の一部に蒔絵で瓢箪が描かれている(白黒写真では蒔絵の判別がむずかしいので、想像していただければ幸いである)。今まで調査した鼓胴は、黒漆のみの烏胴か、あるいは全体に平蒔絵を施した鼓胴のいずれかで、部分的に蒔絵を施した意匠は始めている。ウケには細かなカンナ目が施されており、一方のウケには阿古作、反対側のウケにも金剛新六、弥左衛門と朱漆で記されていた。鼓胴に付された資料によると、旧蔵者は画家の鳥海青児。一九〇二年に生まれ、一九七二年に没した洋画家で、古美術の



コレクターとしても知られている。資料の中には長富忠三郎なる人物が鳥海にあてた書状が含まれていた。不思議な鼓胴を入手した鳥海が長富に問い合わせた書状の返事らしく、「先達中は何かという御世話話様でした。御問合せの阿古、金剛新六弥左衛門につき、只今返信を得ましたので同封お送りします。おそくなつて済みませんでした。」等と書かれている。長富は佐藤芳彦氏(わんや書店勤務)に問い合わせたようで、長富にあてた佐藤氏の返事も残されていた。わんや用箋に、阿古については「千音に学んだ筒工で、筒職家である」こと、「古阿古を初代として一本は五代を数え、他は阿古長兵衛を初代として二代、また初代阿古、二代阿古としている本もある」など伝承が多々あること、「阿古長兵衛は東山時代と推定されて」いることを記し、もう一枚の用箋に鼻金剛新六の生没年や前名などを認めた上、「先日は失礼致しました。お問合せの件、左の通りで御座います。十分分りません。胴を拝見させて頂けば幸甚です」と記している。佐藤氏はこの鼓胴を実見されたのだろうか。能楽関係者の間でこの鼓胴の存在を聞かないので、情報を提供しただけだったのかもしれない。

それとは別に、鳥海は白州正子にもこの胴を見せている。白州の『ものを創る』にこの鼓胴に言及した箇所があり、べしみ面と一緒に見せられたことが記されている。付帯資料の中に読売新聞社刊の同書のコピーも含まれていたのので、当該箇所を引いておこう。
お能の鼓といえは、私達が知っている

のは、いくらよくても桃山か徳川初期のもので、これはあきらかにそれ以前のもので、唐草の漆絵も、全体の姿も、古風な形をとどめています。裏に阿古作の銘があり、鼻金剛と呼ばれた金剛氏正（二五〇七〜一五七六）の所有と伝えられ、氏正は天文年間に活躍した能役者でしたから、この鼓もその頃か、室町初期の作かもしれないと推測して、氏正という人は、逸話の多い人物でした。… 中略 … 大きな芸の持ち主で、沢山面白い話を残しているのですが、やわらかい後世の作に比べて、サイズも大きく、無骨な作りの鼓を眺めていると、鼻金剛と呼ばれた人の、絢爛豪華な舞いぶりが、ほうふつとされて来るようです。こういう楽器を用いた室町時代の申樂は、現代のお能より、もっと澁刺としたものだったに違いありません。…

サイズが大きい、と書いているが小鼓と勘違いしたのだろう。小鼓の平均的な全長は二五センチ、大鼓は二九センチ前後だが、この鼓胴の全長は二七、一センチ、革口径一一、三センチ。現行の大鼓より小ぶりである。

ウケ内の銘を信ずれば、室町後期に活躍した鼻金剛、金剛氏正の所持ということになる。蒔絵の一部には絵梨地で葉が描かれているが、絵梨地の技法は高台寺蒔絵によく見られる手法で桃山時代以降、また金剛新六・阿古と記したウケ内の銘は蒔絵より後、というのが漆芸家中里寿克氏の見解である。銘が書かれたのが江戸時代だとすれば、金剛新六・阿古という情報の信憑性が危うくなる。あく

までも鼓胴の形態に従って推定すれば、やや開き気味の乳袋や、棹の中央に設けた節の形には過渡期鼓胴の特徴がうかがえる。やはり胴自体の制作は江戸時代以前、と判断してよからう。鼓胴の成形後、蒔絵を施す「後蒔絵」は鼓の世界ではよく聞く話である。おそらくこれも後蒔絵であろう。

そう推測するもうひとつの根拠が、サイズである。小ぶりだ、と先にも記したが、室町時代のはじめ、大鼓は現在よりもこぶりだったらしい。

『四座役者目録』の大鼓奏者高安与右衛門（道善）の項に次のような記述がある。

「大鼓ノ筒ヲ、大二好ミ初メタル人也」

萬松院・光源院の時代に活躍し、観世宗節の頃の奏者であった「大兵」、道善が大鼓の胴を大ぶりにした、という記述に従えば、室町時代初期の大鼓は小ぶりだったことになる。

室町初期の存在が確実視される大鼓胴の例は少ないのだが、滋賀県山中に建つMIHO MUSEUM所蔵の雷雲蒔絵鼓胴は全高二七、五センチ。ウケ内に「奉寄進 竹生嶋御宝前 永享二年六月廿一日」と記され、世阿弥の存命中に竹生島へ奉納したことが確実視されるこの鼓胴は、線刻こそないが、乳袋の口が開いた過渡期鼓胴の形状をしている。ウケ内部にはカンナ目もなく、中央の節も手彫りで整った線にはなっていない。

二八センチ弱、という雷雲蒔絵鼓胴の全高を、室町初期のひとつの基準と仮定してみた。すると、三〇〜三五センチとほぼ企画の定まっていた過渡期鼓胴の中から、二八センチ

のものがかびあがってくる。

ひとつは、この三月に紹介した個人蔵の鼓胴である。全高は二七、八センチ。乳袋の口はひきしまり、節の形も現行の大鼓として充分通用する。全体に平蒔絵が施されているのだが、蒔絵の下にはしっかりと線刻が残っている。漆芸家の田口善明氏によると蒔絵は桃山時代に施されたらしい。前者では、胴自体の製作を室町初期と推測してみた。

もう一筒が、この新出鼓胴である。

この二筒には、能の鼓胴との共通点が二つある。一つは後蒔絵であるにしろ蒔絵が施されている点、もうひとつは、ウケ内にカンナ目を有する点である。線刻を残しながら着実に能の鼓胴に近づき、それどころか能の鼓胴として認識されていたかもしれないこの二筒が、雷雲蒔絵鼓胴とほぼ同寸である点に注目したい。

こうした鼓胴は、いつまで製作されたのだろうか。京都府下の多治神社では、現在でも秋の祭礼で線刻鼓胴を使用しているのでその下限は不明だが、おそらくある時期一斉に線刻を廃したのではなく、線刻のない鼓胴と線刻を有する鼓胴を並行して製作していた時期があったのだろう。その時期は、小ぶりの線刻鼓胴を製作するようになった時期とも重なっており、室町初期あたりなのではなからうか。そろそろ紙面も尽きてきた。荒っぽい推測を提示してこの報告を閉じることにする。

（東京文化財研究所）